

# 中村古峽、変態心理小説の射程 — 大正期〈狂気〉文学再考のための一視点(二) —

The Potential of Nakamura Kokyo's Abnormal Psychological Literature:

A Study of Japanese Madness Literature in the Taisho Period (Part 2)

竹内 瑞穂

TAKEUCHI Mizuho

キーワード：中村古峽、近代日本の〈狂気〉観、変態心理

## はじめに

本論は「中村古峽、変態心理小説の蹉跎—大正期〈狂気〉文学再考のための一視点(一)」(『愛知淑徳大学論集 文学部篇』四八 二〇二三・二三)の後篇にあたる。具体的な議論に入る前に、前篇での議論をまとめ、問題の所在と本論の目論見を確認しておきたい<sup>1)</sup>。

前篇では、〈狂気〉をモチーフとした古峽の小説草稿二本が、師事していた夏目漱石から酷評された一件に着目し、①「彼の〈狂気〉文学が、この時代の文壇に受け入れられなかったのはなぜか」、②「大きな挫折や転身を経てもなお〈狂気〉文学を書き続けた古峽だが、あえて文学という枠組みを通じて〈狂気〉を語ることにはいかなる意味があったのか」という二つの問いを掲げて考察を進めた。

レオニード・アンドレーエフ『思想』(一九〇二)をはじめとする、同時代に規範視された〈狂気〉文学とそれらに対する文壇の反応を分析した結果みえてきたのは、筋の通らない〈狂気〉表象への忌避<sup>2)</sup>とでも呼ぶべき批評の志向であった。正常の範疇に収まり切らない〈狂気〉という精神を描こうとする以上、筋が通らない唐突さや飛躍はあつて然るべきなのだが、当時の批評をみる限り、そうした唐突さや飛躍は、最終的に作品の明晰な主題や〈思想〉に収斂されるものでなければ評価に値しなかったようだ。

古峽は自身の作品で、〈狂気〉に陥った個人の常軌を逸した感覚・思考の過程をなぞるように描き出そうと試みていた。〈狂気〉それ自体を描くことに特化したともいえるのだが、この時代の〈狂気〉文学に求められた枠組みからは、明らかに逸脱していたといえる。

漱石もまた無意識的にせよ、〈狂気〉文学をめぐる当時の枠組みを前提に古峡の草稿を読んでしまったのだろう。結果、そこに収斂しきれない古峡の〈狂気〉表象は、彼の目には非「小説」的、非「芸術」的な表現としか映らず、それが酷評に繋がってしまったと推察される。

考えてみれば、〈狂気〉自体を描くことを目的とするのであれば、別に小説という形式にこだわる必要もない。事実、古峡は次第に文学を離れ、一九一七年には日本精神医学会を設立して、機関月刊誌『変態心理』を創刊。以降は、変態心理学研究の一環として〈狂気〉を書き記す方向へと歩を進めることになる。

本論ではこれら前篇の議論を踏まえ、残された②「大きな挫折や転身を経てなお〈狂気〉文学を書き続けた古峡だが、あえて文学という枠組みを通じて〈狂気〉を語ることにはいかなる意味があったのか」という問題を中心に考察を進めていく。また同時に、作者・読者・批評家といった多様なステークホルダーによって構成された大正期の文学共同体が、〈狂気〉を如何様に〈消費〉していたのかを、古峡の〈狂気〉文学を軸としつつ描き出してみたい。

その見取り図からは、当時の文学共同体が抱いていた〈狂気〉観の無意識的な偏向や、古峡の〈狂気〉文学の有した特異な位置と意義とが浮かび上がってくるはずだ。

なお本論では、〈狂気〉を本質的・普遍的な概念としてではなく、歴史的・文化的な文脈のもとで構築されたものとして考えていく。議

論の過程では、今日的な感覚からは差別的とも思われる言説もとりあげることになるが、あくまでこの時代の〈狂気〉観を、実際に流通していた言葉を通じて捉えていくためである。

### 一 『変態心理の人々』における改変

結局、漱石に読んでもらった古峡の草稿のうちの一本が世に出たのは、一九一八年一月号の『変態心理』誌上だった。ただし、それは精神病患者の事例を紹介した記事「二狂人」の前半部分「一、変質狂」としてである。翌年には、彼の研究や評論などがまとめられた書籍『変態心理の研究』（大同館書店 一九一九）に「仮寝の後」とタイトルが変更された上で再録もされたが、「出来るだけ事実には忠実ならんことを努めた」この作品が、読者に「狂気の由つて来る経路、その恐るべきこと、また如何にしてこれを予防すべきかの問題に対し、多少でもヒントを与ふることを得たら、余の望みは足りる」（「序」、二頁）と語られており、この段階ではあくまで変態心理学の研究資料として位置付けられていたことがわかる。草稿の辿った文学作品から研究資料へとこの紆余曲折には、文学者から心理学研究者へと古峡の転身がまさに反映されているといえよう。

ところが本作には、後にさらなる位置付けの変更がなされることになる。それをもたらしたのは、関東大震災（一九二三）に被災した古峡に到来した〈創作熱〉の再燃であった。



図表 1. 広告  
「変態心理の人々」  
〔東京朝日新聞〕  
1926.7.19朝刊) 1面

この改版『殻』の「自序」にしたためられた、もう一度創作活動に携わりたいという古峽の願いは、さらに彼の短編を集めた『変態心理の人々』（二九二六）の刊行に繋がっていく。（参照・図表一）

本書収録作の初出をみてみるとわかるように（参照・図表二）、その多くがもとは『変態心理』の記事であった。したがって、小説というよりも実録や評論として書かれた作品も少なくなかったと推測され

この小説「Ⅱ『殻』」を書いてから後、私は自分の仕事の都合上、今日まで全く創作に筆を染めることが出来ませんでした。所が昨年の大地震後、私はまた時々創作の熱に襲はれるやうになりました。それでその解熱の一手段として、爰に先づ、久しく絶版になつてゐた上、更に右の震災でその紙型まで焼かれてしまつた此の小著の復活を図つた次第です。今後追々に新作にも手をつけることが出来たら幸福だと存じます。<sup>2</sup>

図表 2. 中村古峽『変態心理の人々』（大阪屋号書店1926.6）収録作品一覧

題名	初出等	備考
ある青年の遺書	書き下ろし。1926.4 執筆	執筆時期は、古峽日記（1926）より
田舎教師	『変態心理』1(4) 1918.1	初出は『変態心理』の記事「二狂人」の「二、早発痴狂」。中村古峽『変態心理の研究』（大同館書店1919.11）にも掲載
二狂女	『変態心理』4(4) 1919.10	
うたたねの後	『変態心理』1(4) 1918.1	初出は『変態心理』の記事「二狂人」の「一、変質狂」。「仮寝の後」と題して、『変態心理の研究』（前掲）にも掲載
盗癖	『新潮』20(1) 1914.1	初出時タイトルは「甥」
正心邪心	書き下ろし。1926.4 執筆	執筆時期は、古峽日記（1926）より
見棄てられた魂	『変態心理』4(5) 1919.11	初出時タイトルは「花江ちやん」
三 上奏者 S 君	『変態心理』5(2)・(3) 1920.2・3	初出時タイトルは「狂人研究(2) 上奏者 S 君—代表的な一訴訟狂—」、「狂人研究(3) 彼の入院前後—代表的な一訴訟狂（続）—」
蕃地から	『中央公論』31(8) 1916.7	

る<sup>3</sup>。だが、『変態心理の人々』の広告が、「本書は変態心理研究の権威たる著者多年の研究中の事実取材せられた創作数編」をまとめたものであると紹介していたことの意味は軽視してはならないだろう。重要なのは、当初は異なった意図によって書かれたであろういくつもの著作が、この段階においてすべてが「創作」、すなわち文学という枠内に引き入れられていることなのではないだろうか。

実際、『変態心理の人々』に収録するにあたっては、字句の変更にとどまらない様々な改変が施されている。『変態心理』(四(四)一九一九・二〇)を初出とする『二狂女』をみてみよう。初出版の冒頭には「此の一篇を森田医学士に呈す」(四〇七頁)、末尾に「この材料は全部森田医学士が余に与へられたものであつて、云はば合作とも云ふべき性質のものである。茲に事実を附記して同学士に謝す。―古峡生」(四一八頁)との付記がみられる。

「森田医学士」とは、日本精神医学会の活動を通じて古峡と親交を深めていた森田正馬を指す。森田は、精神科医として巢鴨病院、根岸病院などで働き、のちに東京慈恵会医科大学教授となった人物で、神経質を対象とした精神療法である森田療法の創始者として知られている。古峡以上に著名な精神医学者だった森田から材料を提供された「合作」であるという看板は、書かれた内容を権威づけるのにあつらえ向きだったはずだ。ところが、収録版ではこれらの付記はすべて削除されてしまっている。

似たような改変は『上奏者S君』にもみることができるといえる。本作は、

『変態心理』誌上で不定期連載された「狂人研究」シリーズのなかのひとつで、初出時『変態心理』五(二)、(三)一九二〇・二、三)には「代表的な一訴訟狂」という副題が付けられていたが、収録版では削除。本文でも、S君が「パラノイア」であることに触れた後に付された「(パラノイアとはどんな精神病であるかは、本誌昨年十二月号所蔵、白楊生の『大本教徒の心理解剖』中、第三節『大本教徒の心理的分析』第四を参照して貰ひたい。又幻想と被害妄想が何を意味するかは、本誌本年一月号に出てゐる余の『狂気とは何ぞ』を参照せられたし。)」という括弧書きがすべて消されている(三〇一頁)<sup>4</sup>。

森田の助力を記した付記や、参照すべき研究を示した括弧書きなどは、『変態心理』誌上の議論を知悉している読者には有意義な情報だったのだろうが、文脈を共有しないまま単行本のみを手にとった読者には過分な情報となる可能性は高い。削除は後者に対する配慮とも考えられるのだが、いずれにせよ初出時には与えられていた研究資料としての役割が希薄化され、文学作品にいつそう接近することになったのは間違いない。

古峡の狙い通り『変態心理の人々』所収作を文学作品として読み進めるのならば、これらの改変はどのような影響を具体的に与えたらすものだったのだろうか。『上奏者S君』を例に検討を進めてみることにしよう。

## 二 〈狂気〉の経験を分かち合うテクスト

### ―『上奏者S君』、『見棄てられた魂』

『上奏者S君』は、小説としては少々複雑な構成を有している。前半は主人公・杉野を焦点人物とする三人称小説の形式をとるが、後半からは杉野によつて書かれた上奏文などが複数引用され、また本文末尾には入院時に彼が医員に語つたとされる、一人称の口述筆記が載せられている。

物語は、杉野が優秀な小学校校長としてしばしば表彰されていたこと、さらに「熱心な中等教員の志望者」でもあり、熱心に講習会などにも参加していたことが語り手によつて紹介されることから始まる。だが、「此の勤勉な校長が、明治三十九年六月になつて俄然休職を命じられ」てしまう。

ある日彼は平素の如く何心なく登校して見ると、机上に一封の書状が載つてゐた。「中略」彼は其の日午後の授業を休んで役場へ行つて見ると、思ひもかけぬ辞職勧告の一件である。／「一体何故に僕は辞職しなければならぬですか。」彼は驚きのあまり、少しせき込んで斯う尋ねた。顔色は真蒼になつてゐた。／「理由は私には分らない。しかし郡役所からの達示だから」と、白髪頭の村長はいやに落ちついてゐた。(一九三頁)

さらに彼は役所の役人に付き添われて隣町の医師の診察に連れられてかれ、「冗談もい、加減になさい」と云つてやりたいほどの愚問を含む、様々な質問を浴びせかけられることになる。「まるで毎日彼が教へてゐる小学校の生徒並に自分を取扱はれて、口答試験でも受けさせられてゐるやうな馬鹿馬鹿しさ」を感じた彼の答弁は、「自然逆襲的にならざるを得なかつた」という(一九五頁)。杉野にしてみれば、理由もわからないまま日常生活が突如崩れ落ちていくやうな感覚であろう。不可解であるがゆえに恐ろしく、また憤ろしくもある。

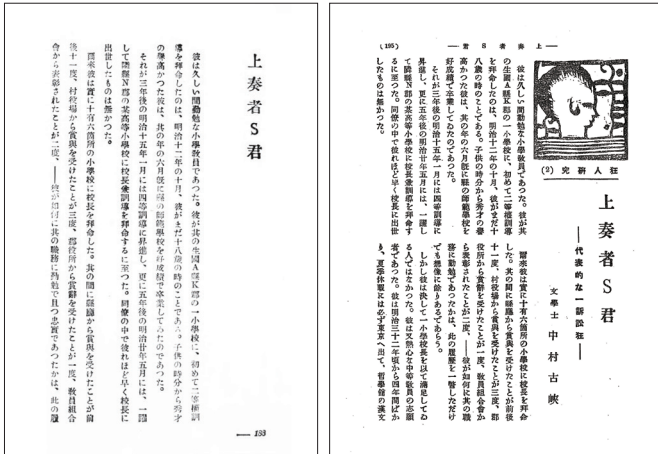
このように前半部分では、理不尽な世界に巻き込まれていくことに対する、杉野のとまどいや憤りは丁寧な語られていくが、肝心の「なぜ休職を命じられたのか？」という謎については、なかなかはっきりとした答えが示されることはない。以前、杉野が同僚との口論の後、しばらく感情が不安定な状態が回復せず「脳病院」での治療を受けたことがあつたことや、同僚に毒殺されかけたことがあつたと大袈裟に語る様子なども書き込まれており、杉野がどこか病的な部分を抱えた人物であることまでは推測できる。だが、それが休職命令の原因だとはまでは確定することはできないのである。

これが後半に入つてくると、杉野の行動は明らかに〈狂気〉じみしてくる。議員への陳情、県知事・村長らを提訴、さらには天皇への上奏の企図を繰り返すといった常軌を逸した行動の数々が、具体的な書簡や上奏文の引用を伴いながら語られていく。そしてついには、「以上の記録を一見された読者は、この杉野がパラノイアといふ一種の精神

病に罹つてゐることを直ちに看破されるに相違ないと思ふ」(二九五頁)という遠回しな言い方ではあるものの、語り手によって杉野が「パラノイア」(偏執病、妄想症)という精神病患者であったことが客観的な事実として確定されていくのである。

収録版ではこのように、杉野の主観に寄り添った前半と、それを相対化していく後半という物語の断層が目立つ。プロット自体は、『変態心理』の記事として出た初出版と同じなのだが、収録版と初出版では読み手に与える印象は大きく異なつたつていた可能性がある。なぜなら、初出版にのみ「代表的な一訴訟狂」という副題が付されていたからだ。(参照：図表3)

副題を前提に読むのであれば、タイトルにある「S君」こと杉野が、「訴訟狂」という精神病患者であるという〈答え〉があらかじめ示されており、前半部分も最初から病がもたらした認知の歪みを描いた話として受け取ることができてしまう。



図表3. 中村古峡『上奏者S君』冒頭：[右] 初出版 (『変態心理』5(2))、[左] 収録版 (『変態心理の人々』)

しかし、小説として提示された収録版には副題が削られていた。「訴訟狂」というサインが消去されたことで、物語構造上、読者は主人公・杉野に寄り添う語り手の語り手に誘導されながら、彼が直面した世界を理不尽さもそのままに追体験させられることになるだろう。あたまから精神病患者の妄想だと決めつけて読む時とは、明らかに異なる経験がそこにはあるはずだ。精神病患者の記録から小説へとジャンルを移行させられたことで、『上奏者S君』は、〈狂気〉を分析するためのテキストから、その経験を読み手と分かち合うためのテキストへと組み替えられていったといえるのではないか。

古峡本人がどれだけ意識して改変を施したのかはわからない。だが、収録版にみられた志向は、『変態心理の人々』の他の短編にも大なり小なり通底しているようにみえる。

そのうちのひとつとして、『見棄てられた魂』をみておきたい。本作は『変態心理』(四(五) 一九一九・一一)に「花江ちゃん」として掲載されたのち、本書に収録。その際にタイトルが変更されているが、本文等は数ヶ所字句の訂正がある程度で、筋については特に手は加えられていない。身分卑しくない家庭から来た二三歳の少女・花江ちゃんには、入院後誰一人として面会に来る者はなかった。人見知りもせず誰にでも平気で抱かれる彼女は、看護婦や患者たちに持て囃されたが、その振る舞いは「生後満八ヶ月位の程度」だった。彼女が「生来の高度な白痴であるか、はた麻痺性痴呆という一種の精神病」であるかは「死後其の脳髓の解剖に拠るの外は、どうしても明確な証

明を与へることが出来ない」。だが、「何にせよ、精神病院と云ふ別世界の中には、斯う云ふ哀れな子供もゐることを、忘れないでゐて貰いたい」という語り手の言葉で物語は閉じられていく（一八六一―一八七頁）。

語り手の変態心理学／精神医学的な知に基づいて主人公がまなざされるという点については、先にみてきた『上奏者S君』と似た構造を持つ。ただし、「パラノイア」であると断定された杉野とは異なり、本作の場合は花江ちゃんが生きている限り、その症状が何に由来するかは「明確な証明を与へることが出来ない」とされる。当時の精神医療では手の施しようがないことが宣言されてもいるわけだが、語り手の主眼はおそらくそこにはない。精神病院に入った後は誰も面会に来てくれない花江ちゃんは、実質的に家族や社会から捨てられ、忘却された存在である。そんな彼女の病院内での生活を、語り手は淡々と綴っていく。

「花江ちゃんは」総てに表情の欠けてゐることは前にも云つた。所が極めて稀にはさも嬉しさうに笑ひを漏らすことがある。殊に其れは人に抱かれたり負ぶさつたりした時に主として現れる。其の嬉しさが高じて来ると、時には咽喉の奥で変な音声を発しながら、抱かれてゐる人の顔に自分の頬や鼻先を擦りつけて来て、やゝもすると嘔み付きさうにすることもある。犬猫が嬉しい時にする態度に頗る髣髴してゐる。（一八五頁）

現代の倫理観からすれば、患者を「犬猫」に喩えるのは受け入れ難いところがある。だがその一方で、過度に美化することもなく重ねられていく日常の記述が、彼女のような子どもたちが実際に精神病院で生きていたという事実を、我々読者に想起させるものにもなっていることは見逃せない。『変態心理の人々』に収録されるにあたって、本作には『見棄てられた魂』というタイトルが新たに与えられたが、その変更もまた、作品の主眼を明確化する役割を果たしている。収録版は新しいタイトルも含め、全体として精神病院で生きていた子どもたちを「忘れないでゐて貰いたい」という語り手の願いに適ったテキストになっているといえるだろう。

古峡の創作、なかでも研究が進んでいる『殻』については、患者家族、親戚や近隣の人々たちとの関係、そして軍隊生活や精神病院などといった、これまで看過されてきた当時の実情を照射したテキストであると評価されてきた<sup>5)</sup>。『変態心理の人々』にも同じような側面があることは確かなのだが、本書収録作の数篇は、もう一歩先へと踏み出しているように思われる。『上奏者S君』が、患者が直面する理不尽な世界を読者も体感できるよう、語り手が構成されていたこと。あるいは『見棄てられた魂』が、社会から見棄てられ忘却された子供たちが精神病院に実在するのを読者に想起させる物語になっていたこと。これらの作品では、文学という枠組みを用いて、〈狂気〉と向かい合った人々―患者本人のみならず、家族や医療者らまでを含む―の

個々の経験と記憶を読者たちと分かち合うという方法が、積極的に試みられているようにみえるのだ。

### 三 初心への回帰

ここでひとつ思い出しておきたいのが、古峡の文学への回帰が『殻』の改版刊行から始まったということである。改版にあたって『殻』を読み直した古峡は、「今見ると一層不満な点が多くて殆ど閉口」したらしいのだが<sup>6</sup>、彼の回帰に向けての最初の一步が『殻』の再読にあったという事実は興味深い。なぜなら『殻』には、変態心理学者として活躍していた当時の古峡が読んだならば、鋭い自己批判として受け止めざるを得ないような場面が描かれているからだ。

病状の悪化から弟・為雄が入院し窮乏を極めた稔は、知人から紹介状をもらい、藁にもすがる気持ちで「現時日本に於ける斯学界的泰斗」とされた帝国精神病院の院長の元を訪ねていく。

「一体弟御の病気は、どう云ふ風にお悪いのです。」／其時博士は斯う云つて尋ねた。およそ心に思ひあるものは、其れを語つただけでも多少の慰藉は得られるものである。稔も我知らずつい為雄の病歴を語り始めた。けれども博士の此の質問が、稔の境遇を憐む心から出たと云ふよりは、寧ろ新しい研究の資料を繹ねる態度に基いたと云ふことに心付いた時、彼は急に激し

い悔恨と屈辱とを覚えて、中途でぴたりと口を結んだ。「中略」今彼の胸には、現実の傷痕いたみが余りに鋭かった。火は刻々に彼の心髄を焦きつゝある。とても科学者が其材料を取扱ふ時のやうな、冷かなる感想を容れる余地がなかった。<sup>7</sup>

ここでは稔の揺れる心の内を通じて、博士が患者を科学者の立場から一方的に「材料」視することへの強い嫌悪感や、患者とともに苦しみ抜いている家族の境遇に対して全く無関心でいることへの違和感が描き出されている。

確かに、博士の「科学者」としての振る舞いは、結局誰ひとりとして「慰謝」することができていない。だが、変態心理学者という「科学者」となった再読時の古峡は、果たして稔や過去の自分の懸念に、十分に応答できていたのだろうか。主幹を務めた『変態心理』誌の記事や何冊もの啓蒙書において、彼が熱心に書き綴ってきたのは、〈狂人〉を心理学的・精神医学的に分析した記録の数々である。

変態心理学者としての古峡の名を一躍世に広めた、彼の大本教批判をみてみよう。古峡は大本教を、「一宗教性妄想患者」にすぎない教祖の「半ば自動的な濫書」である「お筆先」に集まった「パラノイア、妄想性痴呆、迷信者、山師連等の集団」であり、「何れにしても、其の変態心理の所有者たることは争はれない」と断言し、ひるがえつて「余の一文は、彼等大本教信者の精神診断に於て、正に一検診器を提供するもの」であるとす。当時「大正十年立替え説」のような



終末論を宣伝し社会問題となっていた大本教を叩くことは、古峽に

とって変態心理学という新興の学問領域を宣伝するまたとない好機だった。だが、その変態心理学に基づいた〈科学〉的な診断が、それぞれの抱える苦悩からどうにか救われたいと大本教に集った人々を、本当の意味で助けるものであったかは疑問である。

ここまでの議論を踏まえると、古峽が文学への回帰の一環としてまとめた『変態心理の人々』の「創作」群が、〈狂気〉と向かい合った個々人の記憶に焦点を当てていたことの、古峽自身にとっての意義がみえてくる。それは、心理学研究者として積み重ねてきた仕事においてはこぼれ落ちてしまった部分を、もう一度自らの手で掬い上げようとする試みだったのではないだろうか。かつての自分が『殻』の一場面として書き込んだのは、〈狂気〉と向かい合う家族の苦悶を誰かに理解して欲しい、知って欲しいという切実な想いであった。もちろんそれは、科学的な観点から一般化するのではなく、あくまで〈私〉が被っている個人的なものとして、である。大きな挫折や転身を経てもなお、古峽が〈狂気〉文学を描き続けたのは、それが彼の初心を貫くために不可欠な役割を担うものだったからではなかったか。

## おわりに―古峽の〈狂気〉文学の位置付け

近代は、日本の〈狂気〉観が大きな転換を迎えた時代であった。「狐憑き」といった概念に代表される前近代までの宗教性を帯びた認識は〈迷信〉の範疇に入れられ、心理学・精神医学・精神分析学といった西洋の心をめぐる諸学の知見に基づいた〈狂気〉観こそが、科学的で正しい認識とされていったのである。

ただし、〈狂気〉をめぐる近代的観念が日本の実社会に根を下ろしていく過程では、多様な受容のされ方がなされていたことには注意が必要だろう。「〈狂気〉とは本来あるべき状態の精神からの逸脱や病気であって、まずは治療を施す必要がある」。「それが困難であるならば危険を防ぐためにもコントロール下に置くべきであり、加えて今後の対応ためにもっとよく理解されなければならない」。変態心理学や精神医学にみられるこうした発想のもと、精神病患者は公的に治療・監護・研究の対象として位置づけられていくことになる。

もう少し市井の人々の感覚に寄せた見方でいえば、科学的なまなざしによって以前の靈性を剥ぎ取られた〈狂人〉は、恐るべき存在であると同時に、それゆえに興味深い〈見世物〉として受容されていた。明治期以降、新聞・雑誌で定番の企画となっていく精神病院参観記などは、その典型だったといえよう。

では、このような輻輳的なかたちで形成されていく近代日本の〈狂気〉観のなかで、文学はどのように〈狂気〉を描いていったのである

うか。大正期に限っても〈狂人〉が登場する作品は相当な数が挙げられるであろうし、それらをひとつひとつ検討するだけの余力もない。ただ、本論前篇〔中村古峽、変態心理小説の蹉跌―大正期〈狂気〉文学再考のための一視点（一）〕でとりあげたアンドレーエフの『思想』が、一時期〈狂気〉文学の模範と目されていた事例をみる限り、近代文学の〈狂気〉とは、通常の視点からではうまく像を結ばないような近代人の思想や近代社会が抱える諸問題を、鮮明な像にして浮かび上がらせる（レンズ）として重宝されていたことは確かだろう。裏を返せば、〈狂気〉文学とは近代人の思想や近代社会が抱える問題を描き出してくれるものだという、暗黙の了解が成立していたともいえる。だからこそ漱石は、〈狂人〉の体感した内面世界を執拗に追うだけで、〈思想〉的な像を何一つ結ばないようにみえた古峽の草稿を、小説らしい感じが乏しいと切って捨てたのであろう。

そして、この明治期にみられた〈狂気〉文学をめぐる暗黙の了解は、のちの文壇においても変わらず受け継がれていくことになる。例えば芥川龍之介などは、それを最も洗練されたかたちで発展させた作家のひとりであった。大正中期以降、芥川は〈狂気〉が物語のなかで大きな役割を担う作品を繰り返し描いており、『二つの手紙』（一九一七）、『疑惑』（一九一九）、『奇怪な再会』（一九二二）、『河童』、『歯車』（ともに一九二七）と枚挙にいとまがない<sup>10</sup>。これらの芥川の〈狂気〉文学についても、「精神病者第二十三号の歪んだ感覚が如何に鋭くも『人間』を凝視」している点を肯定的に評価する『河童』の同時代

評<sup>11</sup>などをみる限り、やはり先に挙げた評価軸が、作者・芥川のみならず、読者や批評家のあいだでも広く機能し続けていたことがうかがえる。

そしてそれは、『河童』を「健常者」とその社会が本質的に抱え込む欺瞞・矛盾」と「時代の多くの人々が共有していたはずの不安」とを表出させる〈狂人の一人称語り〉を戦略的に活用した作品として高く評価する小林洋介のような現代の批評などにも<sup>12</sup>、脈々と引き継がれているように思われる。

古峽の〈狂気〉文学も、執筆された時期としては芥川のそれら作品とほぼ重なり合っている。しかし、古峽がこだわり続けたのは、〈狂気〉をめぐる個人的な体験や記憶というものだった。同時代の〈狂気〉観や〈狂気〉文学の方向性と重なり合う部分はありつつも、やはりそれは微妙にずれていたようにみえる。治療・監護・研究の対象や材料という枠組みではうまく捉えきれず、また近代人の思想や近代社会が抱える問題を描き出すための（レンズ）としての普遍性を持つまでに至らない。だが、個々人の目の前に確かにある〈狂気〉。そうした私的ともいえる〈狂気〉の体験や記憶こそが、古峽が掬い上げようとしたものだったのではないか。

注意しておきたいのは、古峽の描く私的な〈狂気〉が、古峽自身が体験したものに限定されていないという点だ。『変態心理の人々』収録作はもちろんのこと、私小説と位置づけられる『殻』でさえも、実は古峽が投影された主人公・稔の体験だけが描かれているわけではな

い。物語の中盤、稔の「長い、惨ましい追想」のなかでは、弟・為雄の〈狂気〉のために振り回され疲弊していく故郷の母親たち家族の経験が描かれるが、作品全体の二割を超える分量がそこに割かれている<sup>13</sup>。ここにまた、〈狂気〉体験の個性性にどうしてもこだわってしまう、古峡の〈狂気〉文学の特質をみてとることができるだろう。

記憶の物語化の問題を考察した岡真理は、他者の記憶が、「リアル」な再現や「ヒューマニズム」の強調などを通じて、「〈出来事〉を鉄条網のなかの出来事として囲い込み、私たちとはいつさい関係のない出来事として安心するための物語」として消費されてしまう傾向に注意を促す<sup>14</sup>。古峡の〈狂気〉文学もまた、そのような「安心するための物語」に転じかねない側面があることは否定できない。『上奏者S君』でみられる、語り手から主人公・杉野に「パラノイア」という診断名が与えられるという結末は、彼が繰り返した不可解な行動の背後にあった原因を明示するとともに、〈正常〉な我々とは隔絶した〈狂人〉の範疇に彼を囲い込む。結果として、杉野の経験は「私たちとはいつさい関係のない出来事」として処理されてしまう可能性は大いにある。

だが、本論ですでに確認してきたように、小説に改変された収録版では、杉野に寄り添う語り手の語りによって、読者は少なくとも前半のあいだは、彼が直面した世界を理不尽さもそのままに追体験させられる。たとえ、読み進めた先で杉野が「パラノイア」であったことがわかったとしても、読者はそこまで体験させられた感覚を「私たち

とはいつさい関係のない出来事」として完全に抹消することはできないのではないだろうか。それは我々読者のなかで、すんなりとは霧散せず、残響し続けるはずだ。

また、古峡の他の〈狂気〉文学、たとえば『殻』や『見棄てられた魂』においても、「安心するための物語」には容易に回収しきれない要素が見受けられる。『殻』では、現代でいうところの統合失調症とみられる症状に苦しむ弟とその対応に四苦八苦する家族の姿が描かれ<sup>15</sup>、『見棄てられた魂』では治療の見込みが立たない知的障害児が、家族・社会から遺棄されてしまっている実情が、その日常を通して描き出される。両作品にはともに、当時の精神医学・心理学の知識では解決できない、いいかえれば囲い込むことができない〈狂気〉をめぐる「現実の傷痕」の数々が書き留められているといえるだろう。

古峡の文学は、同時代の文壇においては「小説らしい感じが乏しい」、文学未満の作品に過ぎなかった。だが、彼は彼なりに、〈文学だからこそ可能となること〉のいくつかを掘り当てていたのかもしれない。大正期文学が〈狂気〉と向かい合うなかで生み出したものを考察しようとする際には、古峡の文学もまたこの時代の一つの達成として、外すことのできない位置を占めるのではないだろうか。

## 付記および謝辞

・本論は、日本比較文学会第五二回中部大会シンポジウム「異常心理の比較文学」(二〇二二年五月七日、オンライン開催)のパネル発表「文学者・中村古峡の蹉跎―大正期文学の〈狂気〉表象からの逸脱」で報告した内容の一部に、追加・修正を加えて論文化したものである。

・本論引用では、旧漢字は適宜新漢字に改め、仮名遣いは本文のままとしている。また、特記がない限り、引用文中の「」内の記述は引用者による注である。

・史料調査にご協力いただいた(医)グリーンエミネンス 中村古峡 記念病院に感謝する。

・本発表の一部は、JSPS 科研費 JP19H01234の助成を受けたものである。

## 注

1 以下「はじめに」では、必要に応じて前篇の論文中的文章を引用している。

2 中村古峡「自序」(『殻』方丈社 一九二四) 一四頁

3 『変態心理の人々』をとりあげた小林洋介『〈狂気〉と〈無意識〉のモダニズム』(笠間書院 二〇一三)でも、「一部は事実取材しながらも小説としての構成を意識しているようにも見えるが、他の一部は著者自身が小説として執筆したわけではないよう」であり、「古峡がここに収録された九つのテクストすべてを本当に〈小説〉として書いたのかどうか疑問が残る」との指摘がある(九七頁)。

4 当該記事には、「パラノイア」とは、「精神病患者の中で最も常人と区別し難」く、「自分は病気だと云ふ自覚が最初から全く存在しない」が、「堅忍不拔なる執着心」を持つこと。そして「例えば訴訟狂の如きものは此の最適例」であることなどが記されている(白楊生「大本教徒の心理解剖」『変態心理』四(六) 一九一九・一二五七〇頁)。また、S君について語り手は「例のパラノイアの著名なる一患者」と位置付けているが、S君のモデルとみられる人物(訴訟の相手、本人の職業・出身地が一致)は、数年前の新聞記事でも紹介されており(「春の精神病患者」『読売新聞』一九一三・三・一三 朝刊 五面)、それを知る読者などは、本作をノンフィクションとして読むことができるようになっていたことがうかがわれる。

5 竹盛天雄「解説・解題」(『編年体大正文学全集』2 ゆまに書房  
二〇〇二)、佐々木亜紀子「変態する人・中村古峡―結節点として  
の『殻』」(『変態』二十面相)六花出版 二〇一六)

6 中村前掲文(一九二四)一四頁

7 中村古峡『殻』(春陽堂 一九一三)二六九―二七二頁

8 中村古峡『大本教の解剖…学理的厳正批判 増補8版』(日本精神医  
学会 一九二〇)六二、六五頁。初出は、同「大本教の迷信を論  
ず」(『変態心理』四(一)一九一九・七)

9 柴市郎(「〈狂気〉をめぐる言説―〈精神病者監護法〉の時代」(『メ  
ディア・表象・イデオロギー』小沢書店 一九九七)

10 芥川龍之介の〈狂気〉小説については、近年に限っても、一柳廣  
孝『無意識という物語』(名古屋大学出版会 二〇一四)、副田賢二  
「〈狂気〉をめぐる欲動と「女性」表象―一九二〇年代の芥川テクス  
トにおける〈狂気〉表象について」(『藝文研究』一〇九(一)二  
〇一五・一二)、小谷瑛輔「芥川龍之介と「狂気」の時代」(『世界  
文学』一二七 二〇一八)などが作品の個別具体的な分析を進めな  
がら、確とした研究を積み重ねている。

11 庄野義信「三月号雑誌創作欄一瞥」(『福岡日日新聞』一九二七・  
三・一四朝刊 六面)

12 小林前掲書 一四四頁

13 中村前掲書(一九一三)一一七―二〇六頁

14 岡真理『記憶／物語』(岩波書店 二〇〇〇)四〇頁

中村古峡、変態心理小説の射程(竹内瑞穂)

15 病跡学の観点から『殻』をとりあげた、新田篤・新宮一成「中村  
古峡「殻」における統合失調症の描写とエピソードグラフィ―」  
(日本病跡学雑誌(八一)二〇一一・六)では、弟の症状を統合失  
調症として解釈し、それが古峡の執筆活動に与えた影響を考察して  
いる。

